

# みかんの話

保井この

私共の食用にする「みかん」(柑果)は「みかん」と言ふ植物の果實であつて、是には温州とか紀州とか八代とか中島とか色々變つた名があります。又其色、形、大きさ、味、香等もいろいろ區別がありますけれども、植物學の上では、一つの名の下に呼ばれて居ますので「みかん」は「みかん」から變つて出来た、いはい、兄弟といふべきもの。「ゆず」「れもん」、文旦、「ぶしゆかん」等は同じ先祖から出た近い親類といつた關係のものであります。是より「みかん」を採つて其外觀から始めて、觀察して見ませう。

大體に云へば、形は扁圓形であつて、其の枝との續き目には、不正の星形に似た緑色の普通に「ヘタ」といふものが附いて居ます。是は柑花の萼が殘つて居るのです。此萼と反對の例に一つの點が

ある、是は徳利形をした子房の頸即花柱といふ部分の落ちた跡であります。

「みかん」の果皮の色は、所謂橙黄色である。是は果皮の内部に「カロチン」といふ橙黄色のものを含んで居る爲に出るのです。序であるけれども、「かき」「トマト」の、果實「にんじん」の根、黄菊の花弁なども等しく「カロチン」を含むからあの様な色をするのです。

「みかん」の果皮には尙外から見ても注意すべきものがある。それは果皮全體に見る小點の事で、此點は、果皮の組織の中にある小さな半透明の囊即油腺といふものがある爲にかく見ゆるのです。今「みかん」の果實を剥いで、其一部をさき、其小口を見ると、小さな半透明の珠を見る事が出来ます。是が油腺であつて他の部分の不透明な所に此所のみが半透明である爲に表面から點々となつて見ゆるのであります。此油腺は果皮を作つて居る細胞の間に隙間が出来、後其周りの細胞が、

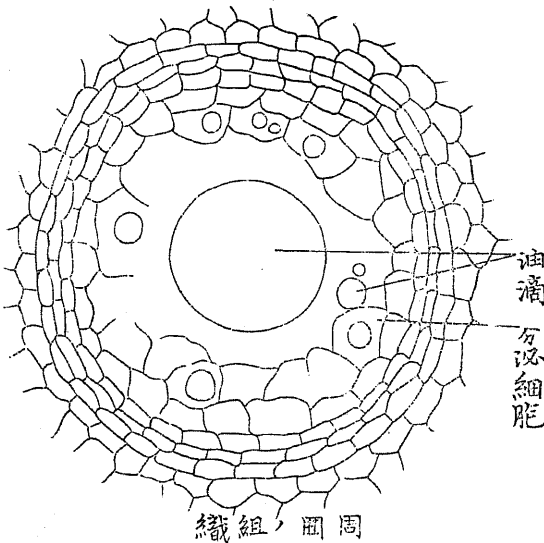
漸々に破れて一つの室を作り其室の周りの細胞が分泌細胞といつて、油を分泌すると共に室の壁となつて、其内に油を貯へるのです。

油腺は「みかん」類の有する一つの特兆であつて柑類の芳香は、此の油腺に生ずる揮發油の爲であります。リモナードに香氣を興へる「レモン油」

は、やはり「みかん」類の「れもん」の果皮から。又薬用や香料に使ふ橙皮油は「みかん」の果皮或はだいごの果皮から。其油腺内に貯へらるゝ揮發油を集めたものであります。次の圖は油腺を薄くきつて顕微鏡で見つて書いたものであります。

「みかん」は前に云つた如く「みかん」果實即柑花子房の成熟したものであります。そして凡ての花の子房は葉の變形したもので、或花では子房は一枚の葉から出来、他の花では二枚以上の葉の集りから出来るのですが、「みかん」は此の後者即多數の葉から出来た子房を持つもの、一つであります。そして其葉の數は常に瓢囊の數と一致する

のであります、即十の瓢囊を持つものは十枚の葉より、九つの瓢囊を持つものは九枚の葉から出来た事を現はすのですか、一つ色の「みかん」では



此瓢囊の數が略一致して居ますけれども、常に一定して居る事はないのであります。今一枚の葉を持つて、其表面即上面を内にして

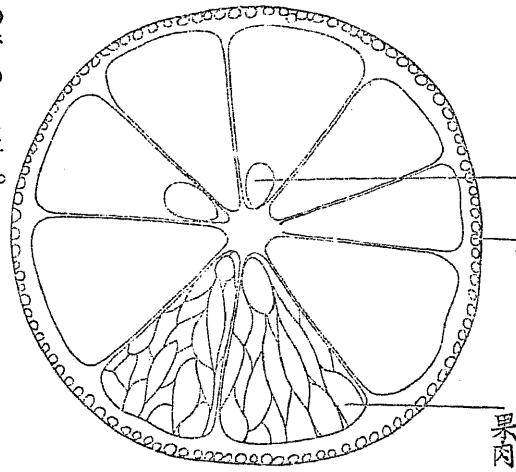
縁邊をつなぎ合せたとすれば一個の室を想像する事が出来る。

圖は「みかん」の若い果實を輪切りにして、其切口を見た所です。即ち

集まつた八枚の葉は一個の果實をなして其内に八室を生じ葉と葉との間は皆密接して互に融合してし

まつて居るのであります。

此の若き果實が漸々成長すると共に室の外周りの壁から室内に向つて突起が出て、段々延びるに随つて其基の所は溢れて緩急に或は漸々に太くなつ



て行き、果實の熟する頃には此突起で室内の空所が凡て充たさるゝに至ります。そして此突起は多數の細胞から出来て居て外壁は小形であるけれども、内部の細胞は大きくて、其内には多量の汁液を含んで居ます。此汁液は糖分に富み芳香と酸味とをも有し、時には稍苦味を帯ぶる事もありますけれども、味がよくて吾等を喜ばせる食料となるのであります。

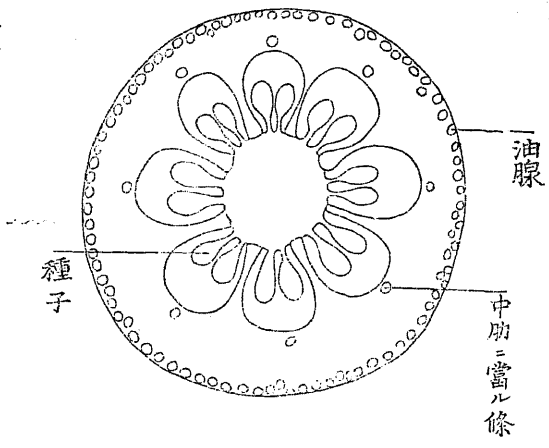
室内が多汁の突起即ち其果肉を以て充たさるゝ頃になると、室の周囲の部分革質に變つて来て各室の間の「仕切り」は二枚の膜となり、外周縁部は外の粗い組織と容易に離れ得る様になりて、室は一つ一つの房として離す事が容易になるのである。

次の圖は完熟した「みかん」の横断面を示してありけす。前の圖と比較せられたなれば此間の變化を容易に認らるゝ事と思はれます。

「みかん」の各室の外側の略中央を通して、一本の

條かあります、此條を下に附いて行きますと終りは「ヘタ」の部分を通じて枝から這入つて來て居る事を見ます。是は子房を作つた各の葉の中肋であります。そして普通の葉の中肋が葉の先端に近づくと共に細くならずと同じに、此果實にても其頂きに行くと共に細くなつて居ます。

此所で私は「みかん」の食べ方を一寸申て見たいと思ひます此様な事は釋迦に説法で或は徒爾かとも思ひますけれども、時々「みかん」の果實を手當り次第に剥ぐ方を見る事があります。是は體裁上を言つても餘り見善ない許りてなく、早く食べるといふ側から見ても損なむき方であります。私は慥か作法の先生から教へて頂いたと思ふのは、果實の頂即ち花柱の



落ち跡のある邊りに一寸傷をつけて、是から果實を二つに縦に割き各を又一つに割いてから房を離しますのですが、此離す時に何れから離すと云ふ事を教へて頂いたが如何かは忘れましたが、私は常に下から上に離します。是は前に申した通り中肋は下が太くて先端に至るに従つて細くなるのでありますから、上から離すと條がとれ難いからであります。此後は先生に教はつた通りかすを果皮に裏んで捨てる様に致して置きます。

此の果皮は薬用に致しますけれども、集めて置いて薬に賣るとども、程高價なものでも有りませぬが、蚊の多い所では是を乾かして置いて蚊遣火としますと至て調法と思はれます。蚊遣火に

は除蟲菊が上等でありませぬけれども「みかん」の皮の馬鹿には出来ませぬ。

却て、房の中には果肉の外に何も無い「みかん」が澤山に有りますし、又上等のもの紀州、八代の如きは種子を有つて居ます。此種子の数は普通二個ですけれども、一個、又二個以上の事も有ります。此種子について面白い事は、通常一個の種子の中には一個の胚と云ひまして、小さな植物を藏するのでありますが、此類には一個に限らぬ事があるので、或學者は「みかん」ではありませんが「くねんぼ」について、七個の胚を含んで居たのを見たと報告せられてありますし、又或人は此類の種子を播いて一種子から二本の植物を得たと云ふ事を記されてあります。

種子の無い「みかん」が食用には結構である事は申す迄も無い事でありませぬが、播かぬ種は生へぬと事ふ事は解らなくとも、何故に種子無しで樹木が殖へるかの疑問は小児の方々の必ず起さるゝ事

で有りませうし、又何故に種子が無いかの問題を起すであらうと思ひますから、一寸序に書いて置かうと思ひます。

第一「みかん」の種子の無いものは皆良種であります。然るに他の不良種は皆種子を生じて是にて殖やす事が出来ます。且若紀州、八代等の如き良種で種子を生ずる種類にても、種子から生じた苗に出来る果實は、(會には非常の良きものが有りますけれども)、大體に申さば常に親の果實よりも數等下つたものとなるのが普通であります。そこで良種を殖し生存せしむる爲には常に砧接をせねばなりません。そして其砧木には下等の苗又は「かたち」を用ひて是に良種の枝を砧接するのでありますから、従つて良種には種子の必要はないのであります。

第二の問題は人為的の撰擇の結果であります。誰にしても「みかん」を食べる時に種子のあるのを厄介に考へるのは同じで、味は良くとも面倒だと

云ふ感かんを起おこすでありませう。是これが所謂いはゆる種子たね無し」を生しょうじた一方ほうの原因げんいんであります。茲こゝに一人にんの「みかん」栽培さいばい者しやがあるとして、其人そのひとが他の栽培さいばい者しやのよりも種子たねの少すくいのを市場しじやうに出いだしたとすれば、此この人は買人かいてから賞讃しょうさんせられ、同時に利益りえきも多おほく得うる事ことでせう。そこでだん／＼種子たねの數かずの少すくいのを心こゝろがけた結果けつぐわは、遂つひに種子たねなしを得うるに至いたるでありませう。但し何故なにゆゑに普通ふつうより少すくい種子たねのものを生しょうずるか等とうの問題もんだいになりますと少すくし難むづかしい理論りろんに涉わたりますから夫それは止とめて置おきませう。併しかし今日こんにちは色々の撰擇せんたく法はふによつて果實くわじつの良種りやうしゆは年々ねんねくに増加ぞうかしつゝあるのであります。

此こゝの記事きじを草ささしやうと思おもひまして私は若干じやくかんの「みかん」と文旦ぶんたんとを檢しらべました、所ところが私わたくしの見た「みかん」は温州うんしやうで相應さうおうに上等じやうとうのものであつたに拘からず、果皮くわひの表面ひやうめんには、何れも圓形えんけいで乳頭にふたうじやう状じやうをして居ゐる小點せうてんを多少たせう見みない事ことはなく、甚なほだしいのは半面はんめん悉ことごとく此點こゝで覆おはれて居ゐりました。文旦ぶんたんには淡綠たんりよく

色しよくの果皮くわひの上うへに美うつくしい模様もようの様に鰓茶色さびいろの圓形えんけい或あるは細長ほそながき小點せうてんの散在さんざいするのを見みました。是等これらは恐おそらく皆様みなさまの「みかん」を召上めしあがる時ときに何時いつも見出みださるものと存ぞんじます。或人あるひとは「みかん」の果皮くわひが瘤こぶのごとく如ごとくなるのは其果實そのくわじつの性質せいしやうであるとさへ思おもふ様やうであります。併しかし是これは非常ひじやうの間違まちがひで、是等これらの小點せうてんを仔細しさいに見みれば、皆貝殼みなかいがらを蒙かうる昆蟲こんちゆうなる事ことを知しられませう。是等これらは皆貝殼みなかいがらを以もつて其身そのみを覆おふ處ところから貝殼かいがらの總稱さうしやうがありまして、其内そのうちには「まるかひがらむし」、「ながかひがらむし」、「とびいろかひがらむし」等色々なほいろいろあります。是等これらは皆其幼蟲みなそのようちゆう期きには細長ほそながき嘴くちばしを有あして、それを樹木じゆぼくの莖は、葉は、果實くわじつ等とうの中に突つき入いれて汁液じゆえきを吸すひ取とるのでありますから、多少たせうに拘からず害がいをするので、甚なほだしい時ときは樹木じゆぼくを變たへすに至いたります。でありますから果樹栽培くわじゆさいばいの盛さかんな亞米利加あめりかや、獨逸どいつの如ごときでは、其警戒そのけいかいが非常ひじやうに嚴重げんじゆうでありますして、果物店くわぶつものみせの店頭てんたうに此様こゝやうな貝殼かいがらの附着ふちやくしたのを飾かざる事は店みせの恥はぢとし、或地方あるちほう

では警察官の干渉さへある程であります。其の爲に我國から輸出する苗木等の全部送還或は火の下に焼却せらるゝ如き災厄に遭ひし事さへあるのでありますから、是等は國民一般に其知識を行使せしめて將來我等の好む果樹の栽培上に好結果を來させたいと存じます。

## 松の話

磯川生

松は目出度いものである。

也有の十七字詩に「松風の里どこ迄を門飾」。また去來に「月雪の爲めにもしたし門の松」。幸田草臣の和歌に「宿毎に立て渡したる今朝見れば都も松の木の間なりけり」とある。又松は獨り新年のつきものであるのみでなく、松と月とは實に配合の極致と云つてもよい。此の二つのものを巧にとら

へ來つたのは其角で「名月やたゝみの上に松の影」と云ふ句は三尺の童子でも知らない者ははない。蓼太の「名月や生れかはらば峯の松」と云ふのもその類である。

抑も松は何故に芽出度いか、古來松に對し悲觀的な歌や俳句がないでもないが、十中九分通り迄は皆芽出度きしるしとなしてゐる。朝早く海岸の松原を散歩した人は、一種云ふ可らざる愉快を感じるのであらう、松はたゞに常緑樹たるから芽出度いのみでなく、松より出づるもの人間に有功なる物質があつて人の齡を伸ぶるから芽出度いのであらうと思ふ。古來公孫樹の下にては子は育たず。高砂のおぢいさんおばあさんが、松の傍に立つてゐるのも大に意味のあることだと思ふ。

偕前提が甚だ長くなつたが、新年に因みのある松につき少し述べて見度いが松は *Gymnos zemaiae* の *Coniferales* の *Pinales* に屬するといふ類のことは暫くぬきとして愛玩用としての松に就て少しの